

C.テデスコ：

ショパンの前奏曲による3つのマドリガーレ

1.ディアーナの恋人の心は冷めてしまった

Non al suo amante piu Diana piacque

ディアーナの恋人の心は冷めてしまった

うっかりと 一糸まとわぬその人が

凍る水辺に立つのを見てしまったから

それよりも 山に住む

むごくつれない羊飼いの娘が

ほがらかに軽いヴェールを濯ぐのがよい

風に吹かれる黄金の髪を包むそのヴェールを

だから私は 空燃えるとき

身も心も愛に凍えてふるえているのだ

2.愛のしるしをみ顔に示し

Perch`al viso d`Amor portava insegna

愛のしるしをみ顔に示し

巡礼の女は私の心を揺すって空っぽにした

ほかのどんな女も讃えるほどではなくなった

緑の野辺にそのひとを追えば

高らかな声が遠く聞こえてくる

ああ、おまえはこの森にどれほど踏み迷っておる！

私はきれいなぶなの木陰に身を寄せて

物思いに沈んだ あたりを見回し

私の旅路は危ういと知った

そして来た道に戻った もうすぐ真昼だった

3.あたらしい天使が翼をはためかせ

Nova angeletta sopra l`ale accorta

あたらしい天使が翼をはためかせ

空から緑の岸辺に降りる

私はひとりさだめへと急ぐ

連れも護衛もない

私を見て 天使は絹の布の罌を

草の上に投げた そこから芝に道ができた

私は捕らえられた けれども落胆はしなかった

彼女の目から この上なく甘美な光があふれていたのだから

R.シューマン/R.Schumann

《リートと歌作品27》Lieder und Gesänge op. 27

4.第一節 教えておくれ、ああ、ぼくのかわいい小鳥よ Sag' an, o lieber Vogel mein / Hebbel

「教えておくれ、ああ、僕のかわいい小鳥よ、
教えておくれ、お前はこれからどこへ旅をするのだ？」
どこへ行くべきなのかは分かりません、
本能の赴くままに行くのです、
だからその道はきっと正しいのでしょう。

「教えておくれ、ああ、僕のかわいいらしい小鳥よ、
言っておくれ、行く先にどんないいことがあるのかを？」
ああ、おだやかな風が、
そして馥郁とした香りが、
そして、新しい春が行く先にあるのです。

「お前は遙かな美しい国を見たことがない、
それなのにどうしてそんなことがわかるのかい？」
あなたはうるさい人ですね、
あなたは暇つぶしで聞いているのですが、
それに真剣に答えるわたしの身にもなって下さい。

こうして本能にすっかり身を任せきった素直さで
小鳥は海を渡って飛んで行った、
そして穏やかな風が、
馥郁とした香りが、
ほんとうに小鳥の行く先にあったのだ。

5.ぼくの恋人は赤いばらのよう Dem roten Röslein gleicht mein Lieb/ Burns

ぼくの恋人は赤いばらのよう、
6月に美しく咲き出でる。
ぼくの恋人はメロディーのよう、
それを聴くと心が燃え立つ。

きみはなんて美しいんだ、恋する乙女よ、
なんてぼくは君を深く愛していることだろう、
ぼくはいつまでもきみを愛するだろう、
海も河も干上がってしまっても。

そして河の水も海の水も干上がり、
岩も石も溶けて流れても、
それでもぼくは生きている限り
ぼくの身も心も君に捧げる。

さあ、いとしい恋人よ、ではさようなら！
さようなら、かわいらしい乙女よ！
ぼくはすぐにでも帰ってくるよ、たとえ
何万里も離れたところへ行ったとしても。

6.私に何が言えよう？ Was soll ich sagen? / Chamisso

わたしは暗い眼つきをし、
むっつりと黙り込んでいる、
あなたはわたしに何か話しをせよという、
それなのにできないのだ！

あなたの眼は澄み切っている、
あなたの口元も生き生きと赤い、
そしてあなたのしたいと思うことは
もうわたしには命令なのだ。

わたしの髪は白く
心は傷ついている。
あなたはそんなにも若く
そんなにも生き生きとしている。

あなたはわたしに何か話をせよという、
そのことがわたしの気持ちを一層辛くする、
わたしはあなたを見つめているだけで、
体がこんなにも震えてくるのだ。

7.ジャスミンの茂み Jasminenstrauch/Rückert

ジャスミンのあおあおとした茂みが
夕暮れどきにまどろんでした、
朝の息吹がジャスミンにふれ、
明るいように光に照らされると、
それは真っ白になって目覚める。
「夜の間は何が起こったのだろうか？」
ほんとうに春の日に夢見る樹々には
こういうことが起こるのだ。

8.ほほえみの眼差しさえあれば Nur ein lächelnder Blick / Zimmermann

きみのほほえみの眼差しだけが、
きみのかやく目の
よろこびの光に満ちた眼差しだけが、
ぼくの心を明るくかがやかせてくれる。

そのように霧深い日の
どんよりと曇った野原に、
不意に太陽が差し込み、
優しい光がぼくたちを晴れやかにしてくれる。

きみの愛らしいたった一言だけでも、
きみのばら色の口元からもれると、
ぼくの存在が
生き生きとしてくる。

そのようにばらの香しい花びらから
搾り取った一滴の香油が、強い香りとなって、
巻髪や胸や衣装を匂やかにしている。

R.クilter R.Quilter

シェイクスピアの詩による 5つの歌曲

9. もはや恐れるな、灼熱の太陽も また牙を剥く冬の嵐も

もはや恐れるな、灼熱の太陽も また牙を剥く冬の嵐も
君は今この世の務めをなし終え、 家路について報酬を受け
取った。 高貴な生まれのものでさえみな、 煙突掃除夫同様
塵に帰るのだ。もはや恐れるな、王の怒りも、 君はもう暴
君の一撃を逃れたのだから。 衣類や食べ物の心配も要らな
い、 君には葦も樫の木と同じ。 王侯も学者も医者も皆同じ
この理によって塵に帰るのだ。

もはや恐れるな、天を裂く雷光も、 轟く恐怖の雷鳴も。 恐
れるな、誹謗中傷の嵐も、 君は喜び悲しみを通り過ぎた。
若い恋人たちもみな 君に倣い塵に帰るのだ。

祈祷師も君の邪魔をするな。 魔女も君に魔法をかけるな。
迷える亡霊も君を起こすな。 災いは君に近づくな。 心静か
に眠ってくれ、君の墓に祝福を。

(『シンベリン』4幕2場)

10. 緑なす森の木陰で

緑なす森の木陰で私と共にくつろいで その楽しい歌を

鳥と歌おうとする友は ここに来たれ、来たれ、来たれ。

ここには誰一人敵はいない

冬と嵐の他には。

野心を捨てて

太陽の下で生き 日々の糧は自分で求め 得られる物で満足す

る友は ここに来たれ、来たれ、来たれ。 ここには誰一人

敵はいない 冬と嵐の他には。(『お気に召すまま』2幕5場)

11. 若者と恋する娘が

若者と恋する娘が

へい、ホウ、へいノニノ 緑の穀物畑を歩いて行った 春の日
に、一年の恋の季節に 鳥は歌う、へいディングアディング、
ディング 恋する若者は春が好き

広いライ麦畑をかき分けて へい、ホウ、へいノニノ

田舎の若者寝ころぶときは 春の日に、一年の恋の季節に

鳥は歌う、へいディングアディング、ディング

恋する若者は春が好き

そのとき二人で歌う歌 へい、ホウ、へいノニノ

人生は唯一輪の花のよう 春の日に、一年の恋の季節に

鳥は歌う、へいディングアディング、ディング

恋する若者は春が好き

だからさあ今を楽しもう へい、ホウ、へいノニノ

愛のために華やかに装飾された 春の日に、

一年の恋の季節に 鳥は歌う、へいディングアディング、ディ
ング 恋する若者は春が好き

(『お気に召すまま』5幕3場)

12. もうその唇は向こうへ行って

もうその唇は向こうへ行って、 あんなに甘い言葉で誓った
のに。 そしてその眼、一日の始まり、 朝と間違うその光る
眼も だけど私の口付は返して、返して、 愛の誓い、空しい
誓いを。

(『尺には尺を』4幕1場)

13. へい、ホウ、風も 吹き雨も降った

おいらがちっぽけな子供だった頃 へい、ホウ、風も吹き雨
も降った。 悪さはほんの悪戯心 雨なんか毎日降るものだ。

おいらがいっばし大人になったとき へい、ホウ、風も吹き
雨も降った。 人はごろつきなんか相手にしない 雨なんか毎
日降るものだ。

おいらが、ああ何と、女房持ったとき へい、ホウ、風も吹
き雨も降った。 威張ってるだけじゃ何ともならん 雨なんか
毎日降るものだ。

ずーっと昔にこの世が出来て へい、ホウ、風も吹き雨も
降った。 さあこれでおしまい、芝居も終わり 毎日お気に召
すよう努めます。

(『十二夜』5幕1場)